



TITLE:

<翻訳>いかにして私は心霊主義者
となったか - 『心霊主義』より -

AUTHOR(S):

熊谷, 哲哉; デュ・プレル, カール

CITATION:

熊谷, 哲哉 ...[et al]. <翻訳>いかにして私は心霊主義者となったか - 『心霊主義』より -. 文
明構造論 : 京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 2010,
6: 131-153

ISSUE DATE:

2010-09-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/126706>

RIGHT:

【翻訳】

いかにして私は心霊主義者となったか

—『心霊主義』より—

カール・デュ・プレル

熊谷哲哉訳

心霊主義(Spiritismus)は、今日におけるあらゆる学問のなかで、いまだもっとも矛盾に満ちたものであり、今後もしばらくの間はそうであり続けるだろう。その理由は明らかに、心霊主義には現在学問と見なされているものと結びつくようなあらゆる脈絡が欠けているように見えるからであり、また心霊主義は今日の学問と相容れないように見えるからである。心霊主義と何らかの学問分野とを結びつける脈絡は、存在する。それが明らかにされれば、心霊主義はより説得力のあるものとされ、矛盾に満ちたその外観は取り去られて、疑いを持っていた人々もより好意的に心霊主義について耳を傾けるようになるだろう。私はそれゆえ、この心霊主義と私たちに身近な学問とを隔てているように見える間隙—決して両者を結びつける中間項がないわけではなく、ただそれはあまり知られていないだけである—を埋めようと考えているのだ。これらの中間項とは、心霊主義の岸辺へとたどり着くために利用することができる、学問的な飛び石であるが、それがなければ迷信の沼を歩いて渡らなければならないだろう。

私は二十年前に外的な状況のために、学問研究にこれまでよりも、いつその時間と熱意を持って取り組めるような立場へと変わったことで、当時の世界中がそうであったように、ダーウィニズムの研究に取り組んだ。² 哲学の研究から出発して、私はダーウィニズムのキーワードである「発達(Entwicklung)」という語に、大きな関心を抱かずにはいられなかった。すで

¹ テキストは、Du Prel, Carl: *Der Spiritismus*. Leipzig, 1893.を使用。本テキストは、Tomas H. Kaiser: *Zwischen Philosophie und Spiritismus. Annäherungen an Leben und Werk von Carl du Prel*. Saarbrücken, 2008.にも付録資料として収録されているが、いくつかの箇所で異なっている部分が見つかったため、参照するにとどめた。なお、本訳文における脚注は、デュ・プレル自身によるもの、すなわち原注については「*」を、訳者による注は番号で示した。

² デュ・プレルがここで言及している「外的な状況」とは、1872年に陸軍を退役し、以後研究と執筆に専念するようになったことを指している。

に地理学と歴史学において、「発達」というキーワードが使われている以上、私にとっては生物学的な中間項をこのような考察に従わせるということは、とくに奇異なこととは感じられなかった。このことがあまりに遅く生じたというのは、歴史的な発達に比べて、生物学的な発達において問題となるような、見通すのが困難なほどの、あまりに長い時間から説明がつくし、また生物学の領域において発達の要因はとても複雑な性質を持っているということも分かるのである。

ダーウィニズムの哲学的本質は、生物学的な合目的性という点にある。生物的な合目的性、すなわち正当な生命の条件にしたがって有機体が適応するということは、本性から直接的に得られるわけではなく、合目的なものによる間接的な淘汰が行われるのである。このような淘汰は、さらなる差異化の過程に繰り返し介入するので、高度な発達、すなわち生命の段階的な上昇を必然的に伴うのである。非合目的なものは生きながらえることはできず、排除される。その結果自然の経過として、合目的なものだけが残し、遺伝によって種を維持するのである。

いまやあらゆる領域における発達が、間接的な淘汰によって合目的性を伴って生じるのであれば、発達の要因がもっとも少なく、もっとも複雑でないところに、その過程は、もっとも明確に見ることができるはずである。この観点における理想的な領域というのは、あきらかに天文学の領域にちがいない。ここに星の運動の合目的的なメカニズムを解明するという条件付きの課題がある。詳しく言えば、—これは本質的なことであるが—私たちにとっては、ここで発達のたったひとつの要因、すなわち重力が重要となるのである。

それゆえ私は期待をもって天文学の研究に取り組み、この無機的な領域において、合目的性による間接的な淘汰を、生物学におけるよりも、より明らかに見いだすことができた。私がこのことを詳しく説明しようと試みた著作は、第三版では『宇宙の発達史』(ライプツィヒ、エルンスト・ギュンター社 1882 年刊) という題名で刊行されている。³ ダーウィン(1809~1882) が執筆した晩年の書簡の、おそらく最後のものにおいて、私が著書を送ったことに対する返礼が述べられているはずだ。

哲学的な意味において天文学に取り組む者は、いかなる生物が他の天体に生存しうるのか、という問題に、最終的に直面することになるだろう。このことについては、すでにもう多くの

³ Vgl. Du Prel: *Entwicklungsgeschichte des Weltalls*. Leipzig, 1882. 初版、第2版では『天上における存在をめぐる闘争 (Der Kampf ums Dasein am Himmel)』という題であったが、第3版において改められた。

先人によって書かれてきたが、そこでは分別よりも幻想のほうが勝っている。この問題について科学的に取り組むために、私たちはそもそもどのようにするべきなのだろうか。エルンスト・カップ教授が、その『技術の哲学』(ブラウンシュヴァイク、ヴェスターマン社 1877 年刊)⁴を送ってくれなかったら、私はこのとき、その問いに対する答えを見つけることはできなかっただろう。この本自体には、先の問いの答えはなかったが、それはこの本の延長上にあった。私がこのことを、エルンスト・カップへの手紙に書いたところ、はじめ彼は技術から宇宙の居住者へという橋渡しに対して否定的だったが、後にはこの問題の解決に全面的に賛意を示すようになった。

カップは、すなわち、人間という有機体には、さまざまな技術的な問題があらかじめ形成されており、それゆえ私たちは有機体についての研究を通じて、技術的な問題の解決をもたらさう、ということを証明した。一つ例だけを挙げるとすれば、人間はカメラ・オブスキュラのなかに有機的な原型を見つけることで、はじめて目の仕組みを理解できたのである。有機体の領域は技術的な領域によって補完される。すなわち、精神とは自然の続いていく先にあるのだ。

一元論的な世界観においては、このことは少しもおかしなことではない。私はそれゆえ、双方の領域からの補完を相関的なものと見なす、という小さな一歩を踏み出そうとしたのである。⁵ 私たちの地球において技術的にもまた解決できるような、有機体についての問題があるとするれば、それはおそらく、地球上で、技術的にのみ解決されるような問題に対して、別の存在条件、つまり他の惑星における、有機体的なひな形を見出すことができるということなのだ。これが、望遠鏡、顕微鏡、あるいは分光器といったものが、有機体的な形態において持っている本質であると考えられる。それゆえ、これらの道具は私たちの技術に由来し、すくなくとも類推においては、他の惑星の居住者をもつ身体的な性質と考えることができる。

私の著作『惑星の居住者たち』(ライプツィヒ、ギュンター社、1880 年刊)⁶において、私は別の問い、すなわち他の星に住む人々の、知的な性質についての問いを学問的に検討することを試みようとした。この問いの解決については、ひとりのロシアの作家、エルンスト・フォン・ペアーアすでに亡くなってしまったペテルブルクのアカデミー元会長がきっかけを与え

⁴ Vgl. Kapp, Ernst: *Grundlinien einer Philosophie der Technik* Braunschweig, 1877. エルンスト・カップ (1808-1896) はドイツの哲学者。『技術の哲学の基礎論』が有名だが、ほかにも教育学や地理学についての著作もある。

⁵ 下線は原著者による強調。以下も同様。

⁶ Vgl. Du Prel: *Die Planetenbewohner und die Nebularhypothese*. Leipzig, 1880.

てくれた。彼の著作『学問的な会合での講演集』（ペテルブルク、シュミッツドルフ社、1864年刊）に収録された（1巻、240～284頁）たいへん注目すべき研究、「いかなる自然観が正当なのか」というのがそれである。私たちの感覚や知性の性質に、私たちの世界観が依存しているという、認識論的な問題は、ここにおいて最も魅力的なかたちで読者の意識にもたらされる。私たちの脳にわずかに修正が加えられたなら、その世界像はがらりと変わることだろう。依然として同じ世界であっても、別の見方をすれば、もはや同じものとは認識することはできない。自然界の偉大なる豊かさのもとでは、生や意識の形態に関して、無数の生命の種を想定することができる。そこにおいてそれぞれは別の世界に生きているが、これらの世界はすべて根本的には同一の世界である。私たちの有機体は、存在するエーテルの振動のうちのただひとつに適応しているにすぎない。どれほど多くの振動の種類があるのか私たちは知らない。しかし、私たちが知らないような振動の種類に適応するような存在がいれば、彼らはまったく異った世界像をもっているだろうし、まったく違った知識や作用の仕方を身につけていることだろう。

お分かりのように、オカルティズムはまさにダーウィニズムの延長線上にある。すなわちオカルティズムとは超越論的なダーウィニズムであり、想像力はそれゆえさらなる広野へと開かれている。その住人がそれぞれ異なった認識と作用の仕方をもっているような、二つの世界の間で境界の接触が生じたという、極めて特殊な現象のきっかけを与えるに違いないと思われるような、事実が提示された場合にのみ、私たちは学問的に、この問題に着手することができるだろう。このようなことについては、すでに相当多くの人が語ってきたところだ。心霊主義者たちは、まさに私が探求求めていたことについて語っている。そこで私は、心霊主義に真実性を認めることができるか否かを探求するという、やみがい欲求を前に立っていた。その他の点で、当時私はこのような領域について、単に数カ月取り組んでみただけであったが、私はすぐに気づかざるを得なかったのだ。心霊主義を学問的に取り扱うことが不可能であり、心霊主義が他の知の領域から大きな溝によって隔てられている限り、私たちには理解不可能であり続けるに違いないということを。それゆえ私は、ある中間項を求めることとなった。私が必要とするのは事実のみであったので、人間自身において、異常な状況のもとで、ある種の正常でない認識や活動の仕方を観察することができるか、という問いを立てたのであった。このことについては、多くの文献において、夢遊症⁷としていまや大変多くのことが語られており、その

⁷ Die Somnambulismus という語は、一デュ・プレルがおもに依拠したショーペンハウアーなどの場合であれば、夢遊病や夢遊症といった訳語があてられる。しかしながら本稿でデュ・プレルが問題としているの

ため私にとっては、この事例が心霊主義への最良の導入であると考えられたのだ。

夢遊症者の能力として、疑いなくあらゆる生理学的な説明を問題としないような、たとえば遠隔視(Fernsehen)とか遠隔操作(Fernwirken)といった能力がある。時間的な遠隔視については、身体的な脳細胞に原因を求めることはできない。ただ一度でも遠隔視現象に遭遇した人は、論理的に言えば、このような能力の担い手と想定せざるを得ないし、もちろんそれは、生身の人間とは異なった、独立した人物である。しかしそのような人物を私たちは知らない。私たちは夢遊症的な能力について意識してはいないし、意図的にそれを用いることはできないからだ。このことから、私たちの自己意識は、私たちの本質全体にまで広がっているわけではない、ということが言える。私たちの本質というのは、すなわち私たちのうちに隠されており、地上の自己意識から遠ざけられている。外的な世界に徹底的に異なった適応をしている存在の本質は、生命を持った本質という性質を示している。これこそが、オカルト的な能力の担い手である。私たちはそれゆえ二重の存在であり、地上の身体性は、身体的に限定された意識とともに、私たちの存在の一つの面のみを形成している。しかしながら、人間の身体的な面しか考慮に入れないがために、視覚的な意味で無視してきた学問にとって、不死性という問題が再び息を吹き返す。死は現象の地上的な形態のみを排除するに過ぎない。私たちが身体性にこだわらない能力を持っていれば、そのような能力者は、死によって脅かされることはないだろう。それゆえ、そのような者は、身体的に制限されていない能力とともに、さらに生き続けるのだ。心霊主義の現象にとって原因となるのは、このような存在なのだろうか。

ここからは、夢遊症と心霊主義がいかなる関係にあるのかということが明らかになる。夢遊症は、私たち自身の魂を見いださせ、魂の死後の生をたしかに見せるのである。このような魂が、人体を離れてから、実際のところ、生きた人間と接触することが可能なかどうか、というのは疑わしいことだ。このような問いに決定を下すことができるのは、明らかに、人間の超常的な能力、すなわち我々自身の魂の能力について知る者だけである。心霊主義はそれだけ単独で研究されてはならず、ぜひとも夢遊症との関連において研究されるべきである。まずはじめに、心霊主義的な諸現象が、霊媒の超常的な力によって、すなわち肉体性をもった魂によって成立するのか、あるいはある未知の目に見えない一連の存在が介入することで引き起こされるのか、それとも結局は諸現象は双方の方向に分けられるべきであるのか、という問いについ

は、病的状態というよりはむしろ、通常の意識を離れた無意識的な行動様式であるので、訳語については適宜、夢遊症または夢遊状態という語を使い分けた。

て私たちは決定を下せるようになるだろう。

夢遊状態と心霊主義とが、多くの似通った現象を示しているという状況は、差し当たり次のようなことを証明している。すなわち、私たちが夢遊状態と心霊主義という二つの場合において、同じような本質を持った活動、または人間的な仲介者と関係を持っているということだ。しかしそれが生きた人間、つまりその場合の霊媒なのか、それともすでに死んだ人間なのかは、差し当たりの類推を通じてだけでは分からないし、さらなる特徴が明らかになって初めて、判断できるようになるだろう。媒介者は、生命を持った状態にあるとも考えられるし、または身体を離れた状態でもありうる。どちらにせよ、同じ力を意のままにするのだから。したがって、私たちは、アニミズム的な理論と心霊主義的な理論との岐路に立っている。どちらの党派にも、このようなことは、始めから確かだと思われているに違いない。身体を持った、または身体を離れた魂は、それが感覚的な世界のなかに現れることがあれば、それは本来の場所にいないということになる。つまりその魂は身体を持った人間と同じように、この地上の世界に適応していないということである。それゆえ魂は豊かな活動の内容を持たず、いわば回り道だけを通して、この世とあの世が接している狭い境界においてのみ、動作しているのだ。確かにこれら二つの世界は、空間的な感覚において隔てられているわけではない。しかしながら、適応の仕方はさまざまであるので、そこから世界における主体の二元論が生じるのである。活動の内容が制限されたものであることが分かれば、それゆえ物理的な障壁は、精神的な障壁より前にあるわけではないということが分かるだろう。このことは、夢遊状態および心霊主義の両方において真実である。二つの領域において私たちは、一つの世界から出たものが、別の、私たちが適応していない世界において作用するということは、どれほど困難なことなのかを、探求することができる。人間が精神の世界に深く入り込んでいることと、同時に霊的なものが、私たちの世界に飛び出していることとは、必然的に少なからぬ困難さを基盤としている。

私はここで、私の遍歴を簡単にまとめておきたい。天文学は私に、全宇宙に有効であるような適応の法則を教えてくれた。ダーウィニズムは私に、地上には多くの生命の、百万にも及ぶ適応の仕方が存在することを教えてくれた。存在を形成する材料が同じもの、すなわち細胞であっても、私たちはすでに地上で、お互いに隠されたままである細胞の本質について知っているのだ。しかしながら、無尽蔵に豊かな自然が、このただ一つの素材、すなわち細胞だけを用いて、生命体を宇宙全体にまで敷衍しようするということを、私たちは不可能であると認めることになる。存在について、そのエーテル的な本性—さらにエーテル的な能力をも備えてい

る—を認めることにかんして、何も私たちを妨げるものはない。

認識論はその上私に、ある生命体の、自然への適応の様式に応じて、この自然を表象することともまた、さまざまに異なってくるということを教えた。それゆえ、客観的に見れば、その時その時の生物がそれぞれに一致した適応の仕方を求めながら、他方で数えきれないほどの適応の種へと別れ別れになってしまうような、あまりにも異なった宇宙がある。しかしそれだけではなく、生物の身体的・知的な性質に関して表象の世界が確かめられた依存関係にある場合には、疑いなく、主観的に与えられた表象世界についての豊かさは、客観的な生命の場所における豊かさよりもよりいっそう大きいのである。生命の場所における差異から、次のように推論できる。すなわち、他の世界には、他の存在！ということである。これにたいして、生物の差異からは、他の存在は、他の世界に！ということが言えよう。もちろん同じ生命の場所にいる存在は、さまざまに異なった仕方ですべての世界に適応しうるのだらう。したがって私たちと同じ世界に暮らしながら、徹底的に異質なものを表象し、徹底的に異質な仕方で行動しているような存在も考えられる。そしてそのような存在について私たちは、それが不思議な存在だということ以外何も分らないが、例外的に夢遊状態において知ることができる。そのような存在は私たち自身にとって意識できないものであっても、私たちの本来的な存在の核と見なされているのである。この存在は、私たちのオカルト的な能力の担い手なのである。

ところでダーウィニズムは、二つの存在が徹底的に異なった方法でもって、まったく同じ世界に適応しうるだろうということを教えてくれる。しかしながら夢遊状態は、同じ世界のまったく同じ存在は、二重の、すなわち異なった仕方でもって世界に適応することができるし、それゆえこの差異によって二つの世界を想像し、特別な作用の仕方をもって、この世とあの世のそれぞれに、同時に生きているのだ、ということを教えてくれる。心霊主義は最終的に、このようなことを教えてくれる。すなわち死とは、これらの適応の一つの立場から見れば身体からの脱魂化(Entseelung)であるが、一方で死は、別の立場から見れば魂からの脱身体化(Entleibung)であることがあきらかとなる。自然へのこの内的な関係の二重性のみを、死は、ふたたび解消するのであって、存在全体を消しさるということではない。

すなわちこれこそが、夢遊状態と心霊主義の間の関係である。これらの仲介者は、双方において同種のものである。媒介者たちは力と能力によって、あちらでは身体性を用いることなく作用し、こちらでは身体性を持つことなく動作する。これは度合いの違いを前提としているが本質的に同じことである。夢遊状態はそれゆえ、現世における和らげられた心霊主義であり、

心霊主義は彼岸における高められた夢遊状態である。

私たちがこのオカルティズムの体系を、個々の要素にいたるまで解体したならば、自然科学との隔たりというのは、見かけよりもずっと小さいものであることが明らかになる。

二つの存在が、あまりに異なった仕方ではひとつの一致した世界に適応し、そこから主観的な世界像と活動領域の二元論が成立するということは、自然科学的に可能である。

一つの存在が、二重の状態において、同じ世界に成り立つとすれば、印象を受けるために、ひとつの現実の領分について、ひとつの特別な認識の器官が得られるのではないか、ということとは自然科学的に可能である。これら二つの認識の群れの間で、不十分にまたはまったく関係が生じないことがあれば、その存在の半分は、他方にとってまったく意識していないということになる。そのような存在は、二つの主観的に隔てられた世界に同時に属する、ある種の高度な両生類のようなものであろう。私たちが意識的な生のためにある中心的な器官、すなわち脳を所有しているのと同じように、私たちの無意識的な生には、二つ目の中心的な器官として太陽神経叢がある。同じように、これらふたつの半分は、ふたたび集まることによってのみ、私たちの全体性となる。それゆえ、私たちの超感覚的な半分、すなわち超越論的な主体(das Transcendentale Subjekt)は、それ自体の表象世界をもち、そこにおいて固有の活動様式をとるのであろう。

一つの存在における二つの適応の仕方と認識の群れについて、そのうち一つに短い時間を、他方に長い時間を付与するとすれば、一方は暫定的なもの、他方は最終的なものとなり、それゆえこれらのうちの一つは、存在の半分となり、他方は長続きする半分となるだろう。このようなことは自然科学的に可能である。

現世と来世とのあいだに、ある種の関係が生じ、その際に、主観によってのみ隔てられた諸世界が、表されるのであれば、それらを隔てる障壁は、単にひとつの生物の観点からのみ存在するに過ぎない、ということとは自然科学的に可能である。このような障壁は地上の認識器官における感覚閾であり、その感覚閾は絶えず位置が変わりうる。このことは生物学の進歩が証明しているし、または目下のところは、夢遊状態がそれを証明している。

一つの自然において、唯一の抽象的な表現をすれば、全ては発達、より詳しく言えば高度な発達として明らかになり、そして客観的に隔てられた世界とのゆるやかな結合が、同じ地上における諸地域の相互関係とおなじように、始まることだろう。このようなことは自然科学的に可能である。

生命の高度な発達によって、さまざまな存在の主體的に隔てられた世界像は、所与の二重の存在における世界像と入り混じるだろう、ということは自然科学的に可能である。

あらゆる客観的にまたは主観的に隔てられた世界は、たがいに別々に成熟し、そこから大きな全体的な宇宙は、広範にそして集中的に広く私たちの表象世界の上へと張り出してゆく。さらに発達することによって、有機体的な全体性へと変化してゆくことが構想されている。このようなことは、自然科学的に可能である。

それに対して、この宇宙はひとつの寄せ木細工であり、発達しているにもかかわらず、いまましい世界であるが、永久にそのようなものとしてとどまるということは、自然科学的に不可能である。私たちの主観的な世界像が及ぶ範囲内で、私たちは事実として、変化、適応、高度な発達、生命の形態とその自己意識の進化といったことを、見つけ出す。このような事実は私たちに、主観的な世界像の境界は、よりいっそう外側へと押しやられ、現世と来世が、最後にはただ一つの世界だけになってしまうだろうということを保証している。このような発達の途上において、是非とも必要な中間的な段階こそが、心霊主義なのである。

オカルティズムはいまだ知られていない自然科学にすぎない。それは将来の自然科学によって証明されることになる。しかし原則的な反論については、今日の科学者はもはやだれも行っていない。ただ頑迷な唯物論者たちばかりが、これに対してさらに反論するだろう。彼らは人間の意識によって表象された世界をただ一つだけしか認めていない。つまり、彼らは認識論的な問題について何も分かっていないからだ。

私たちはいましばらくこの問題について吟味してみよう。自然界において、全ては全てに対して作用している。だがしかし、自然の全体性に適応しているような生命体は存在しないだろう。私たちは限られた仕方でもって因果性の網の目に組み入れられ、私たちの感覚は、種類と能力のとぼしさによって、認識の媒介者よりもはるかに制限を受けている。私たちは、適応することを所与のものよりも、いっそう異なったものとして想定し、そうすることでさらに次のように結論づけることができる。すなわち、異なる適応は、異なる有機体、異なる自然との関係、異なる表象世界を生み出す。それゆえ経験から抽象化しうる自然法則の差異と同じような、異なる経験もまた、そこから生み出されるのだ。ある存在の器官と経験は、その自然のままのそして人工的な作用の仕方を決定している。このような作用のしかた一たとえば人間におけるような一が、ある未知の因果性について敷衍されれば、心霊主義者について非難されるようなことをまさに明らかにするような現象が生じてくるに違いない。すなわち他の自然法則との矛

盾ということである。心霊主義とは、つまり、ダーウィニズムと認識論的な問題についての論理的な裏面であり、世の中のあらゆる心霊主義が、はなからペテンであったとすれば、どこかに本物の心霊主義があるに違いない。唯物主義がこのような結論を導き出すことがなければ、唯物論とは先の折れたダーウィニズムであり、自らを理解することのできないダーウィニズムであると言うことができよう。

耳を持っている存在というのは、その経験から音響学的な諸法則を導き出すだろう。同様に、目を持っている存在であれば、光学的な法則を、まったく別の器官を持った存在であれば、まったく異なる諸法則を。後者のような種類の存在は、活動に際して、すなわちその法則の人為的な使用において、目に見えない存在の知覚の領域—行動の領域ではない—に属するような現象が引き起こされるのであれば、法則との矛盾を見抜かれた後者の現象は、それ自身の幻覚から発しているのか、またはよく分からない欺瞞として説明されることになる。教授たちは私たち心霊主義者を、まったく度を越して視野の狭い連中であると見なしている。というのも、私たちは“自然法則に矛盾した”事物の存在を信じるからである。このような矛盾こそがまさに心霊主義の核心である。このような矛盾は、二つの世界の間に生じる現象において、不可避である。つまり、この矛盾が自然界全体を考慮に入れると、矛盾しているとはいえないので、ただ二つの経験世界の法則にのみ矛盾していることを意味する。このようなことは、今後もお教授たちには理解されないことだろう。

分別のある人間なら、網膜やエウスタキオ管の器官的な問題を際限なく繰り返すために、無数の居住者のいる星々は、ただそこにしかない、と主張したいとは思うまい。しかしまったく異なった器官と経験や行動様式をもった生命がいるとすれば、私たちの地球だけでなく、世界において、心霊主義は自明のこととなる。

心霊主義的な現象について考察する観察者はみな、心霊主義においては二つの世界の間に生じている現象をあつかっている、ということを理解するようになった。「これは私たちに開かれた、新たな世界だ(C'est un monde nouveau, ouvert à nous)」とリシェ教授⁸ はミラノでの交霊実験についての論文で述べている。^{*} だがこの本質については、ちょうど争われている

⁸ シャルル・リシェ (1850~1935) はフランスの医学者・心霊研究者。生理学の研究により、1913年にノーベル賞を受賞している。医学研究の傍ら心霊研究にも熱心に取り組み、ジュレンク=ノッツィングらとエクトプラズムを観測している。また、予知やテレパシーにも関心を持ち、晩年に『第六感』という著作を出版している。イヴォンヌ・カステラン『超心理学』(田中義廣 訳 白水社 1996年)、90頁参照。

^{*} 『物理科学年報』 III-27。

ところである。心霊主義に反対する者たちが理解していない、ということは、ある比較が明らかにしてくれる。目と耳を二つの存在に分けてみれば、それらはたがいに少なくとも賢くなるということなしに、そのつど経験した世界について互いに語り合うことはできるだろう。それらの存在に、対立する能力すなわち目に音を、耳に色を知覚できるようにしたら、その際の受容者は、そのような現象を、唯物論者が心霊主義的なできごとを見るように、判断することだろう。ここで問題になるのは、別の世界である。そのような世界における学問は、直接にはではなく、それらの矛盾から私たちの諸法則によって構成されうるのだということであり、このことが、まさに心霊主義が私たちに自然科学として提供するところの本来の困難さなのである。何の疑いを抱かれることがないとしても、二つの世界の境界が接するところからしだいにそれらの学問を互いに充実させるようなものが生じてくるに違いない、ということは、さしあたり少なくとも事実である。

一つの学問における最初の一步というのは、いつも最も困難なものである。心霊主義においては、さらに別の事情もかかわってくる。つまり、実際に欺瞞的なものが出てきたり、反対者たちの矛盾が解消されることもあるので、心霊主義的実験を行う者それぞれは、何よりも先に、欺瞞を排除するという条件を立てるのである。その現象自体にはなじみがない、ある目的のために設定された、このような条件は、その現象を要求し、明るみに出すような、あの条件と一致することはあり得ないだろう。そこから物理学的な必然性として、より注意して、疑り深く実験が行われると、それだけいっそう現象は弱まってしまうということが、結果的に生じてくる。それを見て反対者たちは、新たに疑念の根拠を得る。だが、分別のある人であれば、これは心霊主義にとってもつけの幸いであり、それを通じて超越論的な物理学に必要な前提を形成する、超感覚的な世界における合目的性を証明できるのだ、ということだろう。

このような状況の下では、少なくともしばらくの間、現象を完全に成り行きに任せたり、それらになじみのない、よく分からない条件を押し付けたりしないことは、実験に取り組む者にとって意味のあることだ。彼はこの現象が、全体的に、いかさまの理論にさらされることになるということを恐れる必要はない。実験者は、少なくともペテンがとうていどり着きえないような、詳細なものに出会うだろうし、その証拠としての力が強力であるので、どのような場合でもその現象が起こるという条件によって、証明する力が増加されることも減少されることもありえないのだ。

しかし私たちは後戻りをしよう。オカルティズムはあらゆる世界もあらゆる存在の系列も、

いつか一度は擁護するに違いない。オカルティズムが要求するのは、ただ三つの条件であり、それら全てを、そのうえ私たちはこの小さな地上に与えられているのを知っている。それらとはすなわち、偉大なる生物学的な時間であり、偉大なる生物学的な豊かさであり、絶え間なく続く進化である。かくして少なくともこのような可能性は受け入れられてしかるべきであろう。つまり、この小さな地上で、思いもよらないようなオカルト的な現象が、今日ではまだ非合理的なことであるのに、ふつうのことになるだろうということだ。また、かりに地上の生物が、大きく隔たったところにおいて、その直観の形態はあまりに異なっているとしても、一致した作用の仕方と同様に、生物は主観的な世界像の変化と一致し、この地上には相前後して生物が生じてくるのだということも考えられる。このようなことも考えられる。地上のある存在のために異なった直観の形式や作用の仕方が同時にあるとすれば、その存在の片方は何を知り、あるいはもしかしたら何を知らないのか。このことはこの世とあの世への同時的な所属と同じことであり、—それは私のつまらない意見だが—、私たち人間にとっても、価値のあることである。私たちが、通常存在様式と並んで、まったく異なる直観の形式と、作用の仕方を備えた、夢遊症的なあり方をしめすことができ、それがしかしながら私たちを、磁気術者たちがしたように、魔術的にたぶらかしているのではなく、潜在状態から高められることができるということは、この前提がなければ説明がつかないだろう。カントもまた、『見霊者の夢』に述べられたように、私たちが地上の人間に知られることなく、現世と来世に同時に属しているという考えを持っていた。

最後にはこのように考えることもできる。この地上には、他の直観の形式や、作用の仕方を備えた生物が、生物学的な将来になって初めて出現するのではなく、今日もうすでに地上に住んでいるのだと。私たちがそれについて何一つ分かっていないのであれば、反対の証拠もないことになるだろう。というのも、私たちはまた、私たち自身の仮説的な存在の系列の構成要素であり、現世と同じように来世にも生きている、超越論的主体について何も知らないか、ほとんど何も分かっていないのだから。

私たちはいまや、このような私たちと同時に生きる存在の系列が、発達によって私たちと境界を接するようになったかも知れないということを想定しよう。それは来世から現世への働きかけに一致する。つまり、私たちの双方向的な主観的世界像と作用の仕方が混じり合い始めるということだろう。それから、あちら側の存在の系列からはまったく合法則的であるのに、私たちの世界においては奇妙に見える、というような現象も生じてくるだろう。いかにして地

上の人間はこのことを認めるだろうか。彼らは、あちら側の存在のことなど何も知らないから、はじめは可能な限り長い間、事実を否認することだろう。このような現象があまりに頻繁な観察のために、もはや関係しなくなれば、人はそれを観察者の何かしら病的な思い込みだとか、ふざけた者が人工的にしつらえたのだとかいう間違った理由から説明することだろう。現象をこのように説明することはとりわけあのような、十分に教養を持ち、自然の中にはもはや何の不思議もありえないと思っているような人間に、好まれるだろう。大抵の場合、この現象への他の解釈については、かの知識人たちが、ムキになって罵ることだろう。彼らの因果律の理解は、現世の現象から導きだされている。それはあまりに深く彼らに馴染んでいるため、あらゆる地平の拡大は、彼らにとっては、痛みを伴った手術のように感じられるのだ。彼らは、他者によって構想された世界からまた異なる事物の因果性が導きだされるということを、理解することができないのだ。存在については、彼ら知識人たちが、私たちの世界で行動する場合に、必然的に学問とではなく、私たちの知と矛盾するような現象が発生するに違いないと言える。しかしかの知識人たちは、ただ来世という言葉から天頂—コペルニクスを引き合いに出したところで何も見えないだろうが一を無意識に思い浮かべるが、単に洞察を得ることが難しいだけでなく、私たちが彼岸をただ自分の内面へ入り込むことによって見つけられるのに、それどころか彼らにとっては、普通の方がするよりも難しいのだろう。簡潔に言えば、真実はまたしても足蹴にされることになるだろう。つまり細部にいたるまで、今日の心霊主義が被っているように。

このような受容への関心から身を守るために、私たちは現世と来世については空間的ではなく、ただ主観的で、認識論的な意味においてのみ話題になりうるのだということを常に考えておかねばならない。カントがいうには、来世とは別の場所なのではなく、別の状態なのだという。ヘレンバッハ⁹によれば、誕生と死とは、直観の形式の交代なのだという。これら二つの名言は、次のように簡単にまとめることができよう。すなわち、来世とは別の見方による現世である。ある存在にとつての、自然への意識的な関係が、その現世を形成する。また、ある存在に知られていない別の存在にとつては同様に、彼にとって未知の自分自身が、来世を形成す

⁹ ヘレンバッハ(Lazar von Hellenbach 1827~1887)は、ハンガリーの貴族の家に生まれ、おもにオーストリアで活動した思想家である。デュ・プレルと同様、個人の認識の問題として、人間の生と死やオカルティズムの問題に取り組んだ。19世紀末に近代オカルティズムの歴史をまとめたカール・キーゼヴェッターは、ヘレンバッハの功績と思想について一章を割いて解説している。Vgl. Kiesewetter, Karl: *Geschichte des neueren Okkultismus*. Wiesbaden, 2007.

るのだ。それゆえ無数の現世と来世が存在しうる。というのも、自然界には、無数の関係性が存在するからだ。確かに無数の存在の系列や、おそらくまた無数の感覚閾(Empfindungsschwelle)の状態というものもある。それは、それぞれの存在の系列にとって、大自然の全体から切り取られた、他の現世なのである。

おわかりのように、心霊主義がある人間に受け入れられるということは、まさしくいくつもの段階に分かれた、個々人の哲学的な慎重さによるものである。たしかに人は単なる経験によって、つまりその人が遭遇した事実の明白な粗暴さによって、心霊主義者となることがありうる。だが、思慮深い心霊主義者となるためには、さらに誰もが持ち合わせていないような、認識論的な問題についての明確な洞察がなければならない。来世を信じることができるためには、現世を疑わなければならないのだ。それゆえこのようなことがすっかり理解できる。すなわち哲学者たちは、認識論的な問題について自己の体系を作り上げたが、カントやショーペンハウアーのように、それゆえに現世に疑いを抱いて、最後には神秘に達することもあるのだということが。** それに対して唯物論者たちは、現世に何の疑いも抱かず、テーブルのへこみを押すことができるから、とそれを現実のものと思ふのだが、彼らは来世とか例などが話題になるや、心からの寒気を催すのである。

自然科学的に思考可能であることは、通常の生または、夢遊状態や心霊主義が示すようなものを、はるかに超え出ているということができよう。このような、あらゆる思考可能性が実際に与えられているとすれば、それは、哀れな虫けらとしての人間の幻想ばかりが豊かであるよりも、自然の豊かさのもとではよりいっそう蓋然性がある。しかしながら、自然とは至る所に男女に分けられた四つ脚か二本脚の存在をのさばらせてしまうほどに貧しいものでもあるのだ。私は反対に、いかなる人間的な幻想もせいぜいある程度しか、真実を汲み尽くすことができないと考えている。それゆえ私たちは、自らを取り巻く、いわば形而上学的な闇の中で、そこからなれることで何が真実かを知らなければならない。ちょうど自然の暗がりや、一匹の蛾が惑星の光に引き寄せられて、それを目指して進むように。

** カントはペーリッツが編集した「形而上学講義」において、またショーペンハウアーは論文「動物磁気と魔術」、「個人の運命におけるみせかけの故意」、「見霊術とそれに関すること」などにおいて神秘への関心が見られる。

【訳者による文献情報の補足】：カントの形而上学講義は、岩波書店版『カント全集 19 巻 講義録 I』に、「形而上学」として収録されている。また、この講義のなかのとりわけ心理学分野について、『カントの心理学講義—前文「カントの神秘主義的世界観」つき—』と題した書籍に、カント自身の講義の抜粋と自己の解説とをまとめている。Vgl: Du Prel, Carl: *Immanuel Kants Vorlesungen über Psychologie*. 1889/1964.

そして次には、オカルティズムが私に経験的な真実としてあのいくつかの考えられる可能性を提供している。人は私に、そのような可能性など軽蔑すべきものとしてうち捨ててしまえと要求するが、それはこの思考可能性が、19世紀に消えてなくなりそうな小さな星に住んでいる存在の、ごく限られた思考習慣を超え出ているからだ。私はむしろ夢遊症や心霊主義のなかに、認識の豊かさの中で地上の存在にとって可能な、好ましいがごくわずかな分け前ばかりを見てしまわないように注意することになるだろう。

だが私たちはこの地上に留まろう。この地上に、私たちは三つの前提条件を見いだした。これらの条件の下にあるのが、一般的な生とオカルト的な生、現世の生と来世の生、連続的に与えられているかもしれない生、異なった存在の系列に同時に分け与えられている、もしくは同時に同じ存在に関して与えられている生である。このような連続性や同時性があるとすれば、唯一の自然が発達を従属させているという事実のもとで、この自然全体が、それゆえに一つの有機的な全体となることを目標としているという保証が生じてくるが、それはおそらくずっと先の未来になってからのことだろう。分けられたものとは、単に一時的に、主観的に分割することしかできないのだろう。それは、空間的に限定された場所における、時間的に限定された発達段階にある生物にとってだけなのである。世界は寄せ木細工ではない。客観的に与えられた生命の場所が、より豊かで近い関係へと変わっていくのと同じように、主観的に分けられた世界像は互いに入り交じって流れ込むに違いない。私たちは火星の居住者と接点を持つようなある種族、または現世と来世という、今日ではいまだ感覚閾—その生物学的な可動性はたしかに事実であるが—によって隔てられた両方の世界に居場所を得ている存在が、この地上に住んでいるのを思い描くことができる。別の考え方をするものは、国境線にあるシマウマのように塗り分けられた遮断棒が、いつまでも永遠に新しく塗り替えられるだろうと思っている俗人と同じようなものだ。

そのような、主観的・客観的な世界の統合というのは、私たちにとって今日いまだほとんど考えることができそうにない。というのも、私たちはそのために天命を授かっている連続する存在の世代において、理性の発達について何も確かな想像などできないのだから。つまり、地上の人間の、現時点での能力で測ったところで分かりえないように見える課題が、存在しているということである。だが私たちは、私たち地球人にとって、そして来るべき人類にとってもおそらくそれは問題にはならないということを、考えなければならない。この地球はおそらくコロンブスにこのような統合を成し遂げさせるにはまったくふさわしくなく、むしろ彼が到着

した場所にいたインディオたちにこそふさわしいのだ。少なくとも心霊主義におけるコロンブスは、この地球によって生み出されることはなかろう。心霊主義は、私たちに示されてきた事実の結果から成立するものである。つまりそれは経験であり、人間による発見ではないのだ。

人は緩慢な時間の無駄の途上において心霊主義者になりうるのだということを、信じている人間が、いまだたくさんいる。しかし同時に、経験を度外視して、思考の途上においても心霊主義者になりうるのだ。もちろんこのような思考が十分に首尾一貫していれば、それはもう心霊主義者になるに違いない。このような人は心霊主義などが話題に上らなかったところで、未来を予言することができるのだろう。私の特殊な事例というのは、いまや演繹的に得られた思考であり、それによって私はオカルティズムについての自らの問いを打ち立てたのであるが、この領域の周辺を見回すことで、私にとっては帰納的に経験的に証明されるのである。このような状況の下で、すくなくとも私個人としては、私がまだ心霊主義者となっていなかったら、もっと早くに時間の無駄が問題となっていたことだろう。というのも、人間がそもそも到達できる最高の確実性とは、論理と経験的事実が一致する場合に与えられるからである。

読者諸兄もここまで述べてきたことから、少なくとも私が一貫して、まったく疑う余地のないところ—私は天文学とダーウィニズムから出発している—から来ているということが分かっただろう。この学問の枝分かれとオカルティズムとを分かち広い間隙については、私はむしろそれを飛び越えようとはせず、一歩ずつ踏破した。推論を通して、—私が審判者として自分の場合について言うことが許される範囲において—、その推論の論理を否定することはできなかったので、私は最終的にオカルティズムに到達したし、経験が私にその真実性を証明したのだ。

今になってはじめて辿ってきた道をふり返って眺めれば、ここで述べたように、この段階的な歩みは、もちろん明白なものに見える。そして私がさまよっている間に、私の中にあった正しい道へと進もうとするはっきりしない衝動に、常に意識的ではなかったというのも当然のことである。だが、確かに私は自覚していた。私が時にそこに進路を向け、時には流されていたような目的に対して、論理と経験的な真実に導かれていると分かっている限りは、とくに気にかける必要はなかったのだということを。

解題

本稿は、Carl du Prel: *Wie ich Spiritist geworden bin* の翻訳である。解題のはじめに、カール・デュ・プレルという人物について簡単に紹介しておきたい。デュ・プレルは 1839 年、バイエルンのランツフトで、フランス出身の貴族の家系に生まれた。大学で法学および哲学を修めた後に、陸軍に入隊し、普仏戦争に従軍したが、1872 年に退役し、以後は在野の研究者としてミュンヘンを拠点に活動した。デュ・プレルの研究活動は、1868 年に学位論文として提出された『夢解釈、超越論的観念論からみた夢について』という論文を出発点としている。軍職を退いた後、とりわけ 1880 年代以降、デュ・プレルは矢継ぎ早に書籍を刊行している。代表的な著作である、『叙情詩の心理学』、『惑星の居住者と星雲説』（ともに 1880 年）、『宇宙の発達史』（1882 年）、『神秘哲学』（1885 年）、『人間の謎』（1892 年）などはこの時期に発表された。本稿からも分かるように、デュ・プレルの心霊研究は、従来の宗教的・秘教的なイメージでとらえられがちな神秘体験や霊的現象を、より科学的に解明しようとした点に大きな特徴がある。デュ・プレルはこのような試みの一環として、ミュンヘンで心理学研究会—のちの実験心理研究会—を結成し、精神科医で催眠状態の人間の活動について探求した、アルベルト・フォン・シュレンク・ノッティングらとともに、オカルト現象の実験的・科学的な検証に努めた。このときの研究成果は、心霊主義者たちに広く読まれた専門誌、『心理研究』や『スフィンクス』だけでなく、大衆向け科学雑誌や文芸誌にも論説として発表された。1880 年代から 90 年代の半ばにかけて、ドイツを代表する心霊研究者として数多くの著作と論考を残したデュ・プレルは、1899 年に 60 歳の誕生日を迎えたのちに亡くなった。¹⁰

本稿、「いかにして私は心霊主義者となったか」は、もともとは 1885 年に出版されたデュ・プレルの代表作『神秘哲学』のロシア語版につけられたまえがきとして書かれたものである。後に他の雑誌に発表された論考「心霊主義の現象学」、「ミラノにおける心霊主義をめぐる闘争」とともに『心霊主義』という題名のもとに一冊にまとめられ、レクラム文庫として刊行されことになった。デュ・プレル自身が、「前文としては長すぎるが、ロシアの、自分の他の著作を読んでいない読者にたいしては、詳しく説明しておきたかった」¹¹ と述べているように、彼がどのような知的な背景から、心霊主義に関心を抱くに至ったのか、そして彼の言う心霊主義が、

¹⁰ デュ・プレルの生涯については、Du Prel, Brieger, Anton (Hrsg.): *Die Psyche und das Ewige*. Pforzheim, 1971. に収録された、編者ブリーガーによる詳細な解説を参考にした。

¹¹ Kaiser, S.195.

どのように他の学問分野と関連しうるのか、つまり学問としてどのように探求しうるのかということが詳細に述べられている。デュ・プレルは生涯に 20 冊を超える著作と、膨大な雑誌記事を残したが、少なくとも本稿を通読することで、彼の問題意識の全体を概観し、独自の用語や概念—心霊主義、感覚閾、超越論的な主体など—がどのように用いられているのかを窺い知ることではできよう。

本論考の中心的内容は大きく分けて、1) デュ・プレルの知的背景、2) 天文学および進化論から心霊主義や多世界論へのつながり、3) 多世界論とオカルト現象実在論との関係、4) 既存の学問分野との関係および未来の学問としての心霊主義、という 4 つのトピックにまとめることができる。以下にその内容を簡単にまとめたい。

1) デュ・プレルの知的背景

すでに述べたように、大学で哲学を学んだデュ・プレルは、その途上でオカルティズムに関心を抱くわけだが、その直接的なきっかけ、つまり哲学的な背景については少なくとも本稿では触れられていない。しかし、他の著作や伝記的な事実から、デュ・プレルがそもそものような関心から、心霊現象に興味を持ったのかを推し量ることはできる。本稿にも引用されているように、デュ・プレルは若い時期からカントおよびショーペンハウアーの哲学を熱心に取り込んでいた。さらに、ほぼ同年代で経歴も似ている哲学者エドゥアルト・フォン・ハルトマン (1842～1906) とは、なかば師弟関係のように密接な書簡のやり取りを通じて、長期にわたる交流があった。ハルトマンは、代表作『無意識の哲学』(1869 年)において、ショーペンハウアーらの夢遊状態 (Somnambulismus) についての研究を発展させ、世界の中心として無意識をとらえようとした。本稿では、言及していないが、デュ・プレルの思想には、ハルトマンの哲学が大きな影響力を持ち続けていた。¹² デュ・プレルにおける哲学的な方法論による心霊研究とは、このように、人間の知覚や世界認識という哲学的な問いを背景としている。

2) 天文学および進化論と心霊主義や多世界論へのつながり

デュ・プレルは、哲学以外に自然科学的なバックグラウンドとして天文学と進化論を挙げている。これらの学問と心霊主義や他の惑星の人間についての考察とは、どのように結びつくの

¹² 『心霊主義』に収められた第 2 論文「心霊主義の現象学」では、ハルトマンの心霊主義理解—とりわけハルトマンが書いた同名の著作『心霊主義』(1885 年) に対して—の批判が試みられている。

か。1859年にダーウィンが発表した進化論は、すぐにドイツの知識人にも受容され、ヘッケルの『万物の創造史』（1868年）に代表されるような、自然史ブームを巻き起こした。とりわけ多くのダーウィン主義者たちが、強調したのが、生存のための闘争という概念である。デュ・プレル自身も、この論考でも言及しているように、『宇宙の発達史』において、宇宙における惑星たちの生存競争について論じている。一方でデュ・プレルは何かしらの目的ないし、合法則性によって、宇宙が動かされ、惑星や生命たちが淘汰されているというある種の目的論も保持している。このような自然科学的な関心は、技術と人間という問題において、多世界論や心霊主義と交差する。デュ・プレルが、カメラ・オブスキュラを例に説明するように一つたりカメラの仕組みを検証することが逆に人間の目の仕組みを解き明かすというように一、人間が技術的に作り上げたものは、そのなかに、人間の器官の仕組みを解く鍵が隠されている。このようなエルンスト・カップの「器官投射説」¹³を援用して、望遠鏡や分光器のような、地球の人間の能力を拡張するようなさまざまな道具の存在こそが、他の惑星に知的生命体が存在し、彼らが地球にいる人間とは別の感覚や能力を持っていることの証左となるとデュ・プレルは考えている。¹⁴そして、地球人とは異なった感覚をもった他の惑星の居住者という発想は、感覚の違いによって隔てられている、という点で心霊現象や死後の魂の生存の問題と結びつく。

3) 多世界論とオカルト現象実在論との関係

オカルト現象として考えられているようなことと、夢遊病的な状態とは似たようなもの、すなわち通常感覚による理解が及ばない領域であるとデュ・プレルはいう。そしてこのような状態にある人間と、地上の人間とは、感覚の関（Empfindungsschwelle）によって隔てられていて、互いにコミュニケーションをとることはできない。デュ・プレルがつかう感覚関というキーワードは、おそらくグスタフ・テオドル・フェヒナーの説に拠っていると考えられる。¹⁵デュ・プレルは、人間の主体は、この感覚関によって限られた場所と時間性・身体性のうちに

¹³ Vgl. Kapp, S.27.

¹⁴ また、別の著書『自然科学としての魔術』においてデュ・プレルは、伝統的に記録されたり、または霊媒実験のなかで観察されているような空中浮揚現象を分析することが、人間が将来的に飛行技術を開発するのに役立てられるのではないかと述べている。Du Prel: *Die Magie als Naturwissenschaft. Bd.1.* Leipzig, S.169.

¹⁵ デュ・プレルは著作の中でたびたびフェヒナーに言及しているし、また「何を読むべきか」というインタビューのなかで、自分にとって影響力を持った本の一つとして、カント、ショーペンハウアーなどと並べてフェヒナーの『ツェントーアヴェスタ、あるいは天空と彼岸の事物について』（1851年）を挙げている。Kaiser, S. 209.

閉じこめられていると考えている。そして通常感覚がおよばない領域として、彼は他の惑星と、夢遊状態と、死後の世界とを併置するのである。すなわち、夢遊症の人間やあるいはただ単に、夜に夢を見ている人間が、その時間は通常の世界とは異なった経験をしていたとしても、覚醒してしまえばだんの生活に戻りうるように、死後の人間でさえも、決して無に帰してしまっているわけではないし、生の世界とまったく異なる死後の世界を生きているわけではないというのだ。デュ・プレル自身の言葉を借りれば、死とは、直観の変容でしかない。つまり、死後の世界における人間は、現世における人間以上に、生き生きとしているのだ。デュ・プレルにおいて、人間とはヤヌスのように二つの顔を持つ存在である。すなわち現世と来世、意識状態と無意識状態というふたつの、相通じることのできない場に、同時に存在するのである。この両者の存在を統合する、いわば通常の自己よりもメタな次元の自己意識を、デュ・プレルは「超越論的な主体」と名付け、それについて探求することを心霊主義の目的として掲げている。

4) 未来の学問としての心霊主義

デュ・プレルが本稿で述べているように、心霊主義はいまだ未発達で、既存の学問によって説明しきれない思想である。既存の学問―彼自身が挙げているように、哲学や進化論や天文学など―によって、オカルト現象や超越論的な主体について科学的に解明することこそが、彼の心霊研究の最終目的である。そのためにデュ・プレルは、本稿では触れられていないが、霊媒による交霊実験やその写真撮影による検証などを試み、さらに古代から伝わる多数の文献や伝説をも資料として収集し、分析した。デュ・プレル自身はあまり多くを語らないものの、彼自身が抱いていた真の関心、あるいは真の目的のようなものがあるとすれば、それは新たな世界観を樹立すること、そして新たな人間の発達可能性を探求することであつたと言える。デュ・プレルのオカルティズムへの関心は、当初から形而上学的な関心とともにあつた。現世の自己と来世の自己、意識状態と無意識状態を統合する、超越論的な主体への探求は、通常の人間には見えていなかった世界がどのように見えるのか、という問いである。一方ダーウィニズムと天文学に代表される、自然科学的な探求は、カップの器官投射説を経由して、人間の更なる進化可能性へと向かっていく。デュ・プレルにおける人間は、地上の世界における感覚の敷居を飛び越え、さらには時空を超越した新たな人間となるべき可能性を備えているのである。

おわりに

最後にカール・デュ・プレルの心霊研究が、同時代的にどのような意味を持ち、そして今日の私たちにとってどのような読みの可能性があるのかということについてまとめた。デュ・プレルの心霊研究は、単に不思議で恐ろしいオカルト現象や死後の生に関心を持つ人々の興味をかき立てただけではない。それだけでなく、彼の思考は、その射程の広さや方法論によって、同時代の哲学や思想の流れのなかで一定の役割を果たしたのではないだろうか。すなわち、この論考ではあまり言及されていないが、夢遊状態や夢を見ている人間についての考察、または詩のような芸術的創造と無意識との関係など、デュ・プレルが考えていたことは、20世紀以降のフロイトの研究とも問題を共有している。¹⁶ また、フロイトも注目した、精神病患者ダニエル・パウエル・シュレーバーは、神の声によって思考をかき乱され、女性の身体へと作りかえられるという恐ろしい神経の病のなかで、『ある神経病者の回想録』（1903年）を完成させたが、シュレーバーの考える世界滅亡後の世界や神と人との関係、そして神による世界の創造と、進化論的生存競争の併存状態といった、独自の世界観のなかには、デュ・プレルの宇宙進化論や心霊研究の影響がかなり強く表れている。¹⁷ また、心霊主義という思想とその広がりについても再評価が必要である。デュ・プレルの心霊主義を今日読み直すことは、単に忘れられたものを掘り起こし、心霊主義という一過性のブームの存在を確認するという以上に多くのことを我々に伝えてくれる。1990年代以降、多くの研究者が、デュ・プレルの心霊主義だけでなく、1880年代から1910年代にかけてのドイツにおける心霊主義および神秘主義的思想の動向に注目し、思想的・文化的に再評価が試みられている。¹⁸ デュ・プレルの著作が、単に彼ひとりにとじたものではなく、多くの信奉者を厚め、大学人や知的な市民にも受け入れられた背景には、同時代の大衆科学ブームや大衆科学としての催眠やオカルトの流行もあったことは見逃せない。もちろん流行だけに留まらず、心霊主義的な思考は、通常感覚や言語によっては捉

¹⁶ 実際にフロイトは、『夢解釈』の改訂版において、デュ・プレルの著作（とくに『神秘哲学』）を参考文献として挙げ、高く評価している。Freud, Sigmund: Traumdeutung. In: *Studienausgabe. Bd. II.* Mitscherlich, Alexander. et al. (Hrsg.) Frankfurt am Main, 1989, S.86.

¹⁷ デュ・プレルのシュレーバーへの影響については、Schreiber, Elisabeth: *Schreiber und der Zeitgeist*. Berlin, 1987.およびHagen, Wolfgang: *Radio Schreiber*. Weimar, 2001.ならびに拙稿「目的・進化・自由意思—シュレーバーにおける世界認識の問題—」：日本独文学会京都支部『Germanistik Kyoto』第9号（2008年）21～38頁所収を参照。

¹⁸ 昨今のデュ・プレル研究の動向については、拙稿「文献紹介 Tomas H. Kaiser: Zwischen Philosophie und Spiritismus. Annäherungen an Leben und Werk von Carl du Prel」：京都大学大学院現代文明論講座文明構造論分野『文明構造論』第5号（2009年）189～198頁所収を参照。

えられない自己、という構想において、リルケやトーマス・マン、ムージルなど多くの 20 世紀以降の文学者とも通じる問題意識であるといえよう。

本稿で自ら述べているように、デュ・プレルの思想は、哲学・進化論・天文学・心理学・心霊研究と、多くの分野にまたがり、それらを横断しながら世界全体を描き出すという手法でなっている。今日の私たちにとって、宇宙の運行システムと人間の心理とは、もちろんまったく別の学問分野として考えられて当然であるし、哲学的な人間観と、死後の魂についての研究とはもはや両立などしえないようにも見える。だが、私たちの日常生活に目を向けてみればどうであろう。科学技術文明が発達し、デュ・プレルが注目した無線通信からさらに高度な、インターネットによって全世界はつながっている。しかしながら私たちにとって、科学技術は多くの場合、未知のブラックボックスに等しいし、それゆえにいまだ新興宗教や疑似科学が人々の信仰や信頼を引きつける事例は枚挙にいとまがない。そして私たちの学問や芸術においては、新たな技術や自然科学的な発見へと向かう知的好奇心と、その未知なる技術や自然現象が私たちに与えるショックや違和感から、新たな表現を創出しようという方向性が、デュ・プレルの生きた 100 年前の世界と同じように存在している。私たちが自明のものとして受け入れている科学技術文明の出発点にあるのは、当然のことながら、この未知なるものや未発見のものであるはずだ。私たちが往々にしてそのことを忘却して、自然科学的な知によってきれいに整えられた（かのように見える）世界に安住してしまっている、ということを、デュ・プレルや心霊主義者のテキストから、再確認することができるのではないだろうか。確かにデュ・プレルにおける科学性については、すでに同時代から疑義を抱かれていたし、¹⁹ 彼の思考における科学的な先駆性や学問としての整合性には大した価値はないだろう。だが、彼が残した宇宙の進化と人間の世界観、無意識状態における人間の活動、夢や夢遊状態と芸術的創造との関係、死後の魂の発達可能性といった一連の問題は、今日の私たちが生きている世界を改めて問い直す契機として、その価値を持ち続けている。

本稿では、以上のようにデュ・プレルのテキスト「いかにして私は心霊主義者となったか」を手がかりに、デュ・プレルの思想の全体像を概観し、心霊主義という思想の射程について簡単に説明した。デュ・プレルの書いたテキストがまとまった形で日本語に翻訳されるのは、お

¹⁹ すでにデュ・プレルの生前から、盟友として活動していたはずのシュレンク＝ノッツィングやヒュッペ＝シュライデンらはデュ・プレルにおける科学的な手続きのずさんさを批判していたという。Vgl. Sommer, Andreas: From Astronomy to Transcendental Darwinism: Carl du Prel (1839-1899). In: *Journal of Scientific Exploration*, Vol. 23, No.1. pp59-68, 2009, p. 64.

そらくこれが初めてである。死後 100 年以上が過ぎて、ほとんど忘れられてしまった人物であるが、その思想は、これから先も、翻訳や紹介だけにとどまらず、さらに読まれ、そして探求される余地があるのではないだろうか。